



大冒險



岩槻駅東口図書館 テーマ展示ブックリスト

平成29年8月1日（火）～9月2日（日）

- 凡例**

書名 : 副書名 (叢書名) 著者名

出版社 出版年 ページ数 大きさ ISBN



極寒の地へ

悠久の時を旅する 星野道夫／著

クレヴィス 2012年 218p 26cm 978-4-904845-25-7

アラスカに魅せられ、アラスカを撮るために写真家になった星野道夫の未発表の写真や雑誌掲載のエッセイを集めた作品集。

南極大陸単独横断行 大場満郎／著

講談社 2001年 227p 20cm 978-4-06-210430-X

自然に挑戦するのではなく融和するために徒歩行を選び、世界初の両極単独徒歩行に成功した著者。本作は99日間かけた南極大陸横断の記録。足の指を失うことになる北極行は、『北極の日本晴れ：氷を歩いて2千キロ』光文社。

北極男 荻田泰永／著

講談社 2013年 222p 978-4-06-218248-5

初めての海外旅行で北極に行って以来、毎年のように北極へ通い続ける著者が、ひとりで、犬ぞりで、無補給で13回の北極行の記録。



灼熱の大地で

サハラ横断 砂の巡礼：ラクダと歩いた四八七日 前島幹雄／著

彩流社 1989年 309p 22cm

渇きに耐え、強盗に襲われ、戦闘地帯を行き、1984年、世界で初めて、ラクダを連れて単身8,000kmを歩いて横断した記録。

リヤカーマン：歩いて世界4万キロ冒険記 永瀬忠志／著

学習研究社 2008年 175p 22cm 978-4-05-203016-1

アタカマ砂漠、アンデス山脈、アフリカなど世界各地を田吾作号と名付けたリヤカーを引きながら歩く著者。マラリアを患い医者から旅を止められたときは「やめたい…やめたくない…帰りたい…続けたい」と心がふり子のようにゆれたという。

インドネシア スラウェシ島縦断：ポンコツバイクで冒険旅行 竹内雅夫／著

東洋出版 1998年 303p 19cm

自由気ままな「反マニュアル旅行」として、レンタルバイクでボルネオの東にあるスラウェシ島という日本人にはなじみのない島を縦断する。当時著者は埼玉県教員。



そこに山がある

植村直己地球冒険 62 万キロ 岡本文良／作

金の星社 1985 年 213p 21 cm 4-323-00909-7

日本の冒険家の代名詞ともいえる植村直己。五大大陸の最高峰への挑戦を描いた本作は児童書として出版されている。『遥かなるマッキンリー：植村直己の愛と冒険』中島祥和／著 講談社は、明治大学山岳部入部からの冒険と妻公子さんとの結婚などマッキンリーで消息を絶つまでの植村が描かれている。

冒険家：75 歳エベレスト挑戦記 三浦雄一郎／著

実業之日本社 2008 年 191p 21 cm 978-4-408-45165-7

数々の山をスキーで滑降した著者が、75 歳での登頂を目指したのは、70 歳で達成した最高齢登頂の時に山頂が晴れていなかったからだという。苦難の連続の登頂記。

垂直の記憶：岩と雪の 7 章 山野井泰史／著

山と溪谷社 2004 年 20 cm 978-4-635-14005-9

世界的なクライマーの著者のクライムの記録。最終章は、夫妻でヒマラヤの難峰ギャチュン・カン挑み、極限状態での登頂、雪崩、墜落からの生還、凍傷で指を失い、それでもやまないクライムへの思いが語られる。



深く広い海へ

素潜り世界一：人体の限界に挑む（光文社新書） 篠宮龍三／著

光文社 2014 年 238p 18 cm 978-4-334-03810-6

酸素ボンベを持たず、足につけたフィンだけで潜るフリーダイビングに出会い、世界一を目指す著者は、日本記録を打ち立てて有頂天になったあと、ブラックアウト（酸欠による失神）を経験する。それでも著者は、世界一を目指して奮闘する。

七つの海を越えて：史上最年少ヨット単独無寄港世界一周（文春文庫） 白石幸次郎／著

文芸春秋 200 年 301p 16cm 978-4-16-767913-

高校三年生で世界一周の夢を持った著者が、その夢をかなえるため、多田雄幸に弟子入りし、その死を越えて夢を果たすまでの記録。

微生物ハンター、深海に行く 高井研／著

イースト・プレス 2013 年 381p 19cm 978-4-7816-1006-1

京大から海洋開発研究機構に入り「関東人」になじめないなか、「深海熱水環境の微生物の多様性」の研究に打ち込み、とうとう「しんかい 6500」で深海へ。



地球をめぐる

グレートジャーニー全記録 1 寄道編 我々は何処から来たのか

2 移動編 我々は何処に行くのか 関野吉晴／著

毎日新聞社 2006 年 ①387p②397p 22cm ①978-4-620-31752-6②978-4-620-31751-9

人類が 700 万年前に生まれて、シベリア、アラスカを通り、パタゴニアに至った経路をイギリスの考古学者フィガンは「グレートジャーニー」と呼んだ。著者はこのルート在先住民と接触しながら自らの力（動力のついた機械を使わず）でゆっくりと進んだ。それはゴールすることが目的ではなく、我々がどこから来て御声行くのか、自分の力で進み、自分で見、自分で考える旅だった。

放浪哲学：11 年かけて 130 カ国 15 万キロの自転車ひとり旅 中西大輔／著

SB クリエイティブ 2014 年 387 p 19cm 978-4-7973-5895-7

いつか自転車で世界一周しよう、そう誓って大学を卒業し、6 年間の会社員生活で資金を蓄えて出発する。野生動物の楽園のはずのガラパゴスの現状に驚き、過酷なアフリカ大陸を越える。世界中でであった人々に助けられ、それが前へ向かう力になる。

夫婦で 30 年間 地球冒険 13 周半の旅 中川隆／著

講談社 2007 年 245p 19cm 978-4-06-213752-2

事業が成功し順風満帆の中、仕事をやめ、結婚 2 年目の妻に「いっしょに世界一周しよう」と言って始まった旅。追剥ぎにあい、マラリアに倒れ、ジープの通関証明の期限が切れ、ビザが発行されない。それでも妻は「この人生には 100 パーセント満足」と言う。

もっと深く：地球の穴と遊ぶ（自然人のための本箱） 近藤純夫／著

岩波書店 212p 19cm 4-00-004084-7

熱帯雨林のパプアニューギニア、強風のトルコの高原へ、著者の主催する地球クラブが洞窟を求めて探検する。豪雨、強風、岩壁、毒虫…スリルとユーモアの冒険紀行。

おじさんたちの冒険 木村幸治／著

山と溪谷社 1988 年 254p 20cm 4-635-25004-0

サラリーマン生活の合間、カヌーで行けるところまで行って電車で帰る、それが長距離旅行の始まりだった。ネパールで自転車のトレッキングを行う人、気球で無着陸長距離飛行にいとむ人など 6 人の「おじさん」の挑戦を集めた。